地域の課題を解決

10社が成果アピール

独創的・革新的な事業で九州経済や地域に貢献する事業者をたたえる「第2回九州未来アワード～世界が驚くKYUSHUへ。」が12月1日、大分市のレンブラントホテル大分であった。1次予選を突破した10社が地方創生・地域振興、国際事業・インバウンド観光の2部門に分かれ、それぞれの取り組みや成果を発表。約200人が訪れ、ファイナリストたちの斬新な発想に耳を傾けた。

九州の未来を切り拓く先進事業者を紹介することで、新たな起業家や事業者の挑戦意欲を喚起しようと、大分合同新聞社など九州7新聞社が主催した。

審査員長を務める一橋大学イノベーション研究センターの米倉誠一郎教授が「見たくない未来を見よう！」と題して基調講演。

米倉教授は観光客誘致などの事業展開は「思い込みではなく、顧客が求めるものをデータから読み取る必要がある」と強調。少子高齢化が進む中、「20世紀型のハード重視のテクノロジーではなく、ソフト重視の新しい技術を世界に持っていく必要がある」と話した。

地方創生・地域振興部門は、放置竹林から作った竹炭や廃棄される三番茶を利用し、青果物の鮮度保持装置を開発した「炭化」（佐賀市）が大賞（アワード）を獲得。地域課題を解決し、拡大が予想される生鮮食品のアジアへの流通を支えられることが評価された。

国際事業・インバウンド観光部門の大賞は、発展途上国でインターネットを使った教育支援ソフトを展開する「教育情報サービス」（宮崎市）。動画のデータ容量が小さく、通信環境の整備が遅れた国でも運用できることが認められた。

両部門とも各社の実力が伯仲。急きょ審査員特別奨励賞が設けられた。

今回創設された学生起業アイデア部門では、地域資源を生かした新商品開発を提案した崇城大学生物生命学部（熊本県）の「UNIT」が初代大賞となった。

独創的、革新的な事業について発表した各社の代表（前列）や学生たち（後列）

崇城大「UNIT」が大賞

学生起業アイデア部門

若者のアイデアを発掘することで九州経済のさらなる発展を目指そうと、今回から創設された「学生起業アイデア部門」。5大学の6組がユニークな事業計画を動画にして発表した。

審査の結果、女子大生の目線で地元特産品からリキュールを開発する企画を提案した崇城大学生物生命学部（熊本県）の「UNIT」が大賞に輝いた。

他の出場者は次の通り。

▽増田剛士（東京電機大、大分市出身）▽Experience JAPAN（立命館アジア太平洋大）▽Hero Egg（崇城大、熊本県）▽橋本ゼミナール（日本文理大）▽夜道安全プロジェクト（佐賀大、佐賀県）

2015年12月21日　大分合同新聞 朝刊　12～13面